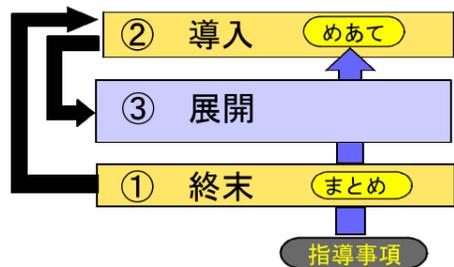


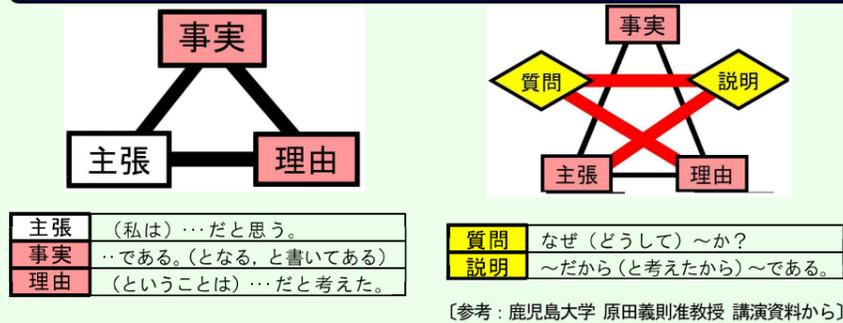


「学習者主体の授業」に向けて子供の立場から大切にしたい考え方

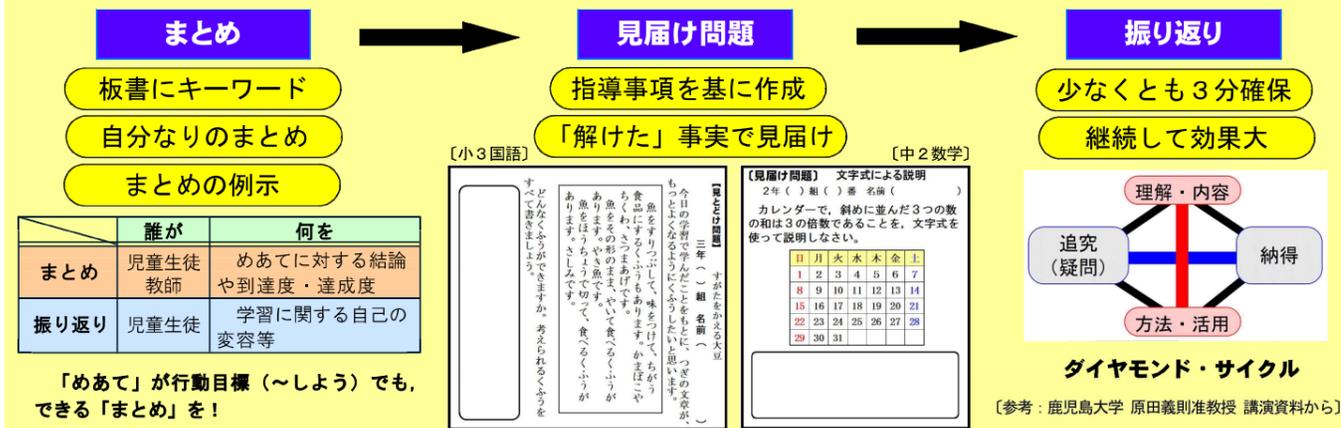
子供がゴールを見据える
単元・授業デザインにつながる
大隅終末ベーシック



子供が状況に応じて活用することで学びの深まりにつながる
三角ロジック **ペンタゴン・ロジック**



学習の理解度や自己の学びの変容を子供自身が把握し、次の学びにつなげる **「終末3点セット」**



子供が導入で「何を明らかにするのか」「何ができるようにするのか」などのゴールを見据えられることが「学習者主体の授業」の実現に必要です。

発達の段階に応じて、三角ロジック等の思考ツールを自分の意志で活用できる状態にすることが大切です。また、子供自身が理解度を把握し、次の学びにつなげるために「終末3点セット」は重要です。

職員室に子供の学びを見取り、語り合う雰囲気がありますか？

子供の学びの姿から
学校で目指す子供の姿が表出する授業づくりは、子供の学び姿を継続して見取ることから始まります。目の前の子供の学び姿から授業の改善策を考えていきましょう。

短い時間でも
研究授業だけでなく、短い時間でも互いに授業を参観して、日々共に語り合うことが大切です。

教科・学年の枠を超えて
担当する教科や学年が異なっても、子供の姿を見取ることはできます。子供のよい学びの姿は、どうして表出したのか、どうして活動が停滞していたのかなどを考えたり、話し合ったりすることが大切です。

自分の学びへ
子供の学びを見取することで、授業づくりの課題を解決するためのヒントを得られることが多いです。研修後に学びを振り返り、明日からの授業に還元していきましょう。

共通実践へ
子供の学び姿を基に考えた改善のための取組は、教科・学年の枠を超えた全職員での共通実践につなげましょう。

校種の枠を超えて
校種の枠を超えて参観することによって、日頃と異なる視点からの発見につながる可能性が高いです。また、幼・保・こ、小・中の円滑な接続について考えることも大切な学びです。



「主体的・対話的で深い学び」を実現するために

大隅教育事務所

「主体的・対話的で深い学び」を実現し、資質・能力を育成するためには、以下に示す3つの柱に沿った取組が重要です。

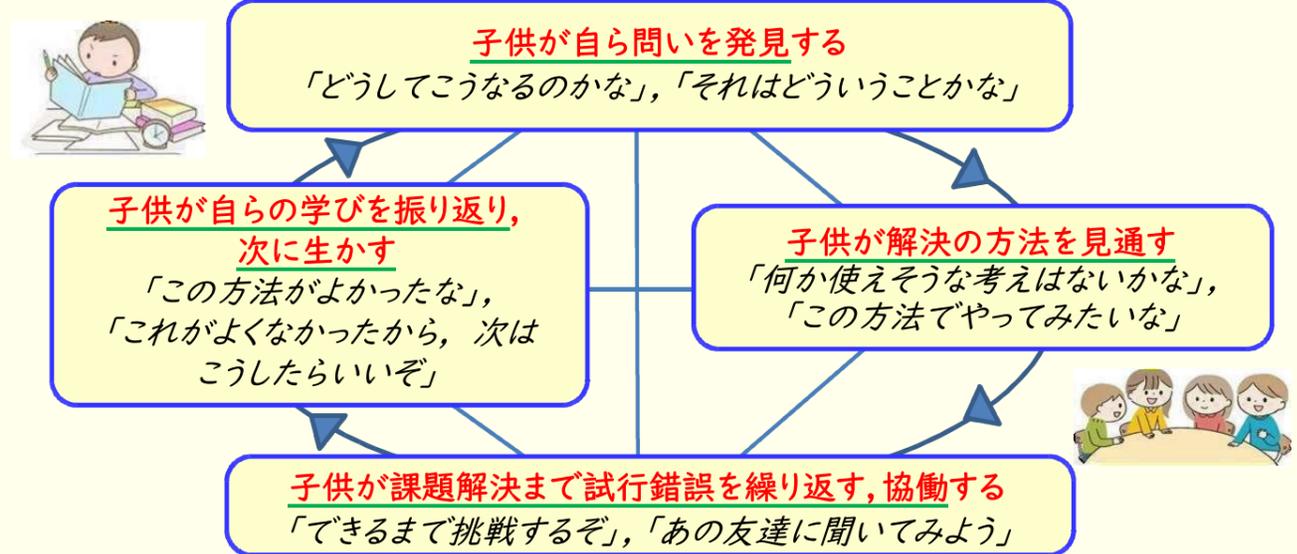
「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善

- 柱1** 学習者主体の授業づくり
- 柱2** 演習問題の計画的な実施
- 柱3** 補充指導，個別指導の充実

今回は、**柱1**に焦点を絞り、「各過程における働き掛け」について説明します。

令和6年度版大隅学力向上リーフレットは、この3つの柱の中で「学習者主体の授業づくり」に焦点を絞り、「各過程における働き掛け」をテーマとします。

「学習者主体の授業」では、県教育委員会が示した以下の図のように、子供の頭の中がぐるぐる働きっぱなしの状態が思い描かれます。しかし、このような「学習者主体の授業」は、簡単には実現できません。新しい単元や題材に入る前に、学習指導要領や教科書、指導書等を活用して単元や題材全体における目標を踏まえた単元づくりを行った上で、毎時間の授業づくりを行うことが大切です。そして、授業では、児童生徒の思考の流れに沿った適切なタイミングで発問したり、学び合いの場を設定したりするなどの各過程における教師の働き掛けが重要になります。適切な働き掛けを行うためには、子供のつぶやきや反応から、何にこだわっているのか、どこにつまずいているかをしっかりと見取って認めたり、子供に合わせて立ち止まり一緒に考え、新たな視点を与えたりしながらしっかりと伴走するファシリテーター的な役割が求められます。



「大隅終末ベーシックの考え方で、単元及び授業をデザインする」

単元をデザインする。

詳細は、令和5年度版参照
・単元デザイン例 (小3国語、中2数学)
・単元デザインの3つのポイント



授業をデザインする。

詳細は、令和4年度版参照
・三角ロジック等
・見届け問題
・ダイヤモンド・サイクル等による振り返り



※ 大隅終末ベーシック …「授業の終末を根本に据えて、授業をつくる」という考え方

令和4年度版「授業づくり(1単位時間)」及び令和5年度版「単元づくり」のリーフレットと併せて教材研究を行うことが効果的です。今回のリーフレットは各過程における働き掛けを整理してあります。是非、いつでも見える場所に置いて、授業前や授業中の確認に活用してください。

【学習者主体の授業になっていますか？】

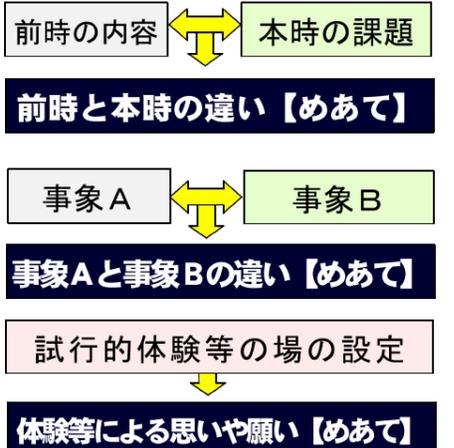


以下に示す子供の姿が表出するように、子供を信じて委ね、学ぶ様子をしっかりと見取り、思考の流れに沿った働き掛けをすることが大切です。そして、表出した一人一人のよさに着目し、伸ばしていこうとする教師の姿勢が必要です。

めあて

子供が自ら問いを発見する
「どうしてこうなるのかな」「それはどういうことかな」

- 子供が短時間で問いを立てるための工夫
- 子供が問いを立てるための場の設定
 - ・ 前時と本時の学習内容の比較
 - ・ 事象提示による比較
 - ・ 学習計画表や前時からの流れの確認
 - ・ 子供の解決したい思いや願いを高める体験等
- 子供が問いを立てるための発問
 - ・ 「前の学習とどこが違うかな。」
 - ・ 「AとBを比べてどこが違うかな。」
 - ・ 「〇〇さんはどんなものをつくりたいかな。」
 - ・ 「今日は、何をやる予定だったかな。」(学習計画表の確認)
- まとめと整合性のあるめあての設定
 - ・ 可能な限り、疑問形で設定すること

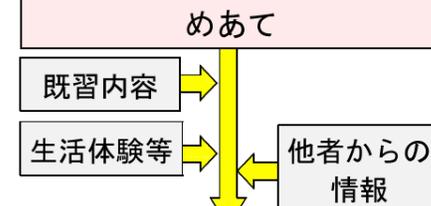


子供が問いを発見するために時間がかかる場合がありますが、問いを立てる場の設定を継続することで、短時間で問いを発見できるようになります。全国学力・学習状況調査でもどのような問いを見いだすかを選択する問題が出題されており、問いを見いだす力を育成する授業を展開していくことが大切です。

見通し

子供が解決の方法を見通す
「何か使えそうな考えはないかな」「この方法でやってみたい」

- 子供が解決の見通しをもつ場の設定
 - ・ 子供が自分で考える場の設定 ※ 教師の過度な説明を控える。
 - ・ 見通しに必要な情報の獲得を促す働き掛け (ノート, タブレット端末, 教科書, 掲示物等)
- 見通しを共有する場の設定 (ペア・グループ→全体)
 - ・ 三角ロジックを活用した見通しの説明
 - ・ 教師による発問 (例)
「どうしてそう考えたのかな。」
「〇〇さんが△と考えたのはどうしてだと思ふかな。」
- 見通しと振り返りをセットにした展開
 - ・ 共有したことを基に、子供が解決の方法を選択し、意志決定する場の設定
 - ・ 子供の見通し(考え)を板書等にキーワードで記録しておくこと(自他の見通しの妥当性を随時振り返るため)

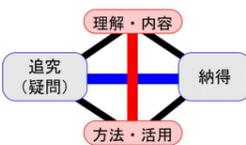


子供が解決の見通しをもてるように、教師が丁寧に前時の学習内容を子供に確認させることがありますが、それでは、教師の意図したルールに子供の学びを導くことになりません。めあてを設定した後は、まずは自分の力で見通しをもつことができる場を設定することを大切にしたいです。そして、子供が困っている場合、必要な情報を獲得できるような働き掛けを促したいです。また、口頭だけでは、見通しの妥当性等を振り返りにくいので、板書等に記録しておくことが有効です。

振り返り

子供が自らの学びを振り返り、次に生かす
「この方法がよかったな」「これがよくなかったから、次はこうしたらいい」

- 振り返りの時間(3分以上)の確保
 - ・ 板書やノート, タブレット端末を用いて学びを振り返らせる働き掛け
 - ・ 教師が板書等を用いて、学級全体で学びを振り返ってから個で振り返りを表現させる場の設定
- ダイヤモンド・サイクル等を活用した複数の観点で振り返る働き掛け
 - ・ 理解・内容
 - ・ 追究(疑問)
 - ・ 納得
 - ・ 方法・活用
- 学ぶよさや意義を共有できる振り返りを発表する場の設定
 - ・ 発表内容に対する価値付け
 - ・ 記述内容を確認した上での教師による意図的指名
 - ・ 教師の見取りによる子供の学びへの価値付け (振り返りで表現されなかったことを含む)



【終末三点セット】

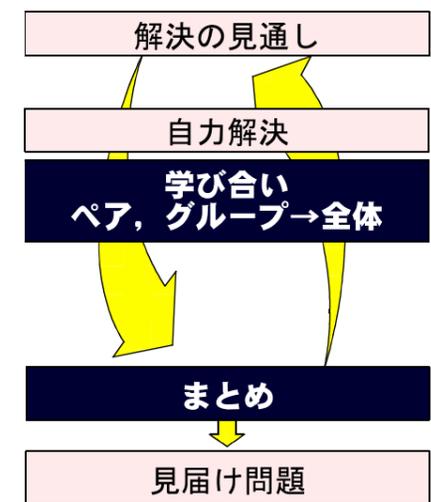


授業の終末が充実するように、終末から授業をデザインしていくことが大切です。【※大隅終末ベーシック】特に、振り返りの時間を確保できないことが続かないようにしたいです。振り返りは、複数の観点で継続することが重要です。自分の学びのよさや他者の存在の意義、学んだ内容と実生活とのつながり等を実感するとともに、書く力の向上にもつながります。同じ内容の振り返りが続く場合は、授業中のよさを価値付けたり、学級全体で板書等を使って学びを振り返った後に個人で振り返る場を位置付けたりすることも効果的です。是非、一人一人の振り返りを大切にしたいです。

学び合い まとめ

子供が課題解決まで試行錯誤を繰り返す、協働する
「できるまで挑戦するぞ」「あの友達に聞いてみよう」

- 子供が試行錯誤しながら自力解決する場の設定及び机間指導
 - [活動が停滞している子供への机間指導]
 - 何に困っているのかを把握して、適切な関わりをすること (※ 失敗の大切さを感じ、学びを調整する体験の積み重ね)
 - [早く解決している子供への机間指導]
 - 「〇〇さんは違う考えをしていたよ。比べてみて。」などと声をかけ、学び合いを促すこと
 - 三角ロジック等を活用し、他者への説明の準備を促すこと
- 互いの考えの相違点や共通点を整理し、結論を導き出す学び合い
 - ・ ペンタゴン・ロジックを活用した質問・説明
 - ・ 教師による発問 (例)
「お互いの考えの共通点(違い)は、何かな。」
「めあてに対するまとめは、どうなるかな。」
「本当に〇〇と言えるかな。」
- 自分の力でまとめを表出する場の設定
 - ・ まとめのリード文の板書, まとめに必要なキーワードの確認



学び合いにおいては、教師がゆさぶる発問等を行うことが有効です。そうすることで子供が自分の考えの妥当性について、三角ロジック等を活用して主体的に説明しようとなります。教師が発問を繰り返すことを通して、子供同士で質問できるようになることを目指したいです。